

毎日が楽しいなんて 每日楽しくないのと同じなんて
そんなことないんだって 証明する毎日

いつかの花火 君の瞳に映るのは

一瞬のキラメキといつまでも咲き誇る笑顔

あの日の電車の窓に 映る君の横顔を
ガラス越しに見る 笑顔眩しくて

響き合う うるさいくらいの笑い声

いつまでも続きますように

未来は当然見えなくて 落ち込む時には
何故か悲しいことばかり 思い出しては回む悪循環
そんな時瞼閉じて深呼吸 笑顔の方程式

今日が過去に変わり 写真が色あせ朽ちても

心に鮮やかな笑顔 消えない自信がある

日ごとに増していく 一瞬一瞬の重さ

僕らの笑 の

こんな僕らだから きっとこれからも
毎日を楽しくいられ

い
ば

小さい頃から遠くに行くのが好きだった。小学生の頃は親に黙つてよく自転車で遠くに出掛けていた。遠くにといつても当時の自分にとつては、せいぜい自分の住んでる町か、その隣まである。それでも当時の自分にとつては大冒険でわくわくするものだった。

そんな性格だったせいか、今ではサイクリング部に入つて日本中を旅している。同じ日本といえども様々で、四国山地は急峻で、高知でみた太平洋は穏やかな瀬戸内海と違いダイナミックで、高野山は修行僧の方が

変わらず「大冒険」をしている。

今と昔でもう一つ変わったと思うのが視線の高さだ。そのことを感じたのが

のに視線の高さが違うと違う風景に見えるし、見えるようになつたもの、見えなくなつたものがあると気付いた。堀の向こう見える うになつたけれど、

草やテントウムシや石ころまでが面白かった。昔はあんなに狭い行動範囲で満足していたのはそのためだと思う。

きっと、今の日常生活でも見逃しているものがいっぱいあると思う。だからたまにはしゃがんでみて、子供の頃の視点で見ることを忘れないようにしたい。



「心にうつりゆくよしなし」とを……」「

20 生 山谷 義貴

は違うんです」と思いながら生きている。ややオーバーだが、誰しも大なり小なり、そんな思いを持っているものではないだろうか。

今回、1年生の「研究室紹介」の取材に同行して、とある先生に「座右の銘」を伺つた際、「あなたはどうなん?」と逆に聞かれた。「座右の
くつかある。たとえば、「小さなことからいひうと」。西川きよしさん
の言葉だ。僕は中学時代、地元の図書館に「やすい・きよし」の漫才の
CDが置いてあるのを知り、何気なく借りて帰つたことがある。そして
すぐに夢中になつてしまい、図書館に置いてある他の漫
の、

「好きなフレーズ」は以上の2つにしておいて、「好きな単語」を挙げるなら、「先輩」だろうか。「先輩」。何と美しい言葉だろう。今年度、1年ぶりに「先輩」と呼ばれる立場になり、「よしひーさん」とか「よしひー先輩」と呼ばれるたびに、嬉しさと照れくさを感じてきた。また、飛翔の1年生からは「山谷さん」「山谷先輩」と呼ばれることもけつこう多く、「山谷」だと「さん」や「先輩」が一層引き立つ気がして、

漫才コンビはいなかつた。今でも吉本のお いは で も
もたくさん借りた。しかしやはり、僕の中で「やすし・きよし」に勝る
こととも何
くな!」とつっこんでくれる人が少ないことは、大変 なことで
(笑)。

「好きな言葉」の話に
きな言葉だ。昨年9月1日月曜日
1 「な
好

ネルをNHKに変え、中継が始まつた会見の最後、低姿勢で穏和な福田氏が放つた一言が「私は自分自身を客観的に見ることができるんです。

うニツクネームは、友達のそれをまねて小6の頃に考案した。もちろんその時に広めようとしてはみた。ただ……、全く広まらなかつた（笑）。その後も、中学校・高校と、周りの人たちが入れ一たピー」の広め直しをしてはみたが、「山谷君」と呼んでいる、小学校時代からの友達の勢力に押されてか、結局広まることはなかつた。そんなことがあつたから、大学生になつて「よしピー」がいとも簡単に広まつてしまつたときには、正直、やや驚いた。

以上、「飛翔な日々」を3ページにすれば全体がきれいにおさまるため、心にうつりゆくよしなしげ」とを、そこはかとなく、長々と書きつゝつてみた。

のも恥ずかしいが、僕は「自分自身を客観的に見……」、いや、自分自身を、相当ユニークでおもしろい人物だと思っている。常に「他の人と